



## 真の奇跡とは？



日本では8割近くの方が病院で亡くなっています。「最期ぐらいは自宅で」。そう願う方の自宅療養を助けてくれる「訪問診療」という制度があります。

京都で訪問診療を続ける尾崎容子医師は、これまで数多くの穏やかで温かい看取りに立ち会ってきました。

奥さまは涙ぐみながら笑い顔を見せ、こう続けてくれました。

「上手に死にましたわ…」その言葉に私たちも感きわまりました。「さすがお父さんや」「上手やな」「人徳やなー」と、泣き笑いで旅立ったAさんを見送ったのでした。みんな、やりきったすがすがしさと笑顔のお別れでした。

後日あらためて、Aさんのご自宅にお参りに行きましたら、奥さまはこう振り返っておられました。「あの時、先生から“終末期”と言われて気が動転しました。ですが、心の準備と実務的な準備ができて、しっかり見送ることができました」

『それでも病院で死にますか』尾崎容子 著より

穏やかな最期に立ち会ってきた尾崎医師は、「死を迎えることは悲劇ではない」と言い切ります。

(もちろん急な別れや、痛みや苦痛を放置された死・誰にも顧みられない死は例外です)

そして患者本人や家族が残された時間をどう過ごしていきたいのかに耳を傾け、どうサポートするのかに心を砕くといいます。しかし、画期的な新薬の誕生など「奇跡」が起こることを、最後まで願い続ける方もいます。そんな時、尾崎医師はさりげなくこんな言葉をかけました。

「ご自身がみなさんからいかに愛されていて、いかに恵まれているかを実感し、残された時間を満ちたりた気持ちで過ごすことができるならば、それこそが真の奇跡ではないでしょうか。新薬ができて命が延ばせても“自分だけがこんな不幸な病気にかかって、いつまでも闘病生活を送っている”という気持ちでいる限り、今と何も変わらないのではないのでしょうか」



仏教には、宗派を超えて唱えられる「三帰依文(さんきえもん)」というものがあります。「人身受け難し…」という一節で始まるこのことば。冒頭を現代語に訳すと、

「この世に人間として生まれた深い意味と尊さに、今初めて気付くことができました。それはまさに仏法の教えを聞くためであったのだと、今ようやくいただくことができました。このどうしようもなく愚かで迷い続けるしかない身は、人間に生まれた一生涯において救われることがなかったら、もう二度と救われるチャンスはないでしょう。」となります。(鶴田義光先生の意識)

生まれてきたこと、仏法を聞く身になったこと自体が奇跡だ、ということを示すことばです。仏教徒として、この奇跡を忘れずに生き、死んでいきたいものです。

